現代の女流文学

編集　女流文学者会

6

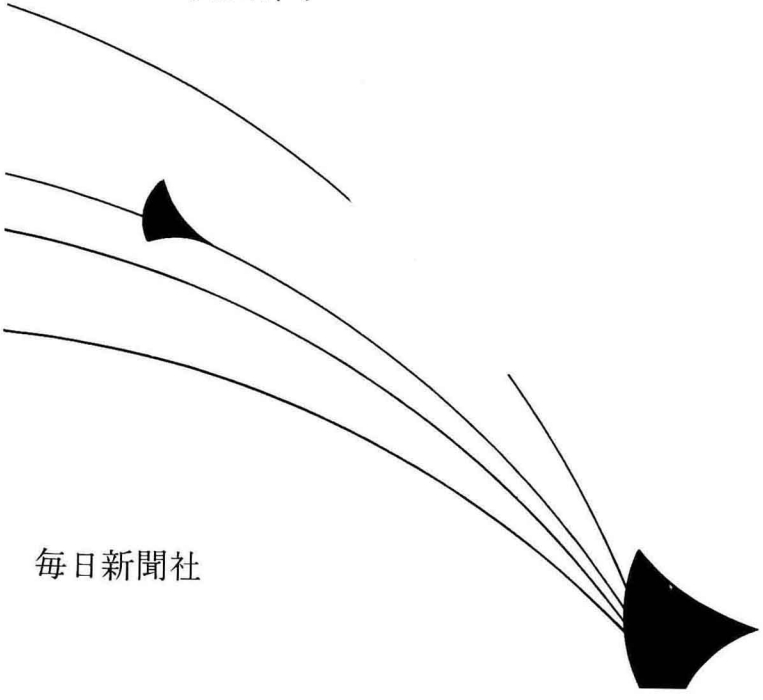
曾野綾子
平岩弓枝
杉本苑子
永井路子
萩原葉子
真杉静枝
森三千代
大田洋子

毎日新聞社

編集　女流文学者会

6

曾野綾子
平岩弓枝
杉本苑子
永井路子
萩原葉子
真杉静枝
森三千代
大田洋子



毎日新聞社

現代の女流文学　第六巻

定価　一二〇〇円

昭和五十年一月十日　印刷
昭和五十年一月二十日　発行

編集　女流文学者会
編集委員　円地文子
佐多稲子

編集人　桑原隆次郎
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町

図書印刷　大口製本
〈検印省略〉

0393—411006—7904

現代の女流文学 6

目次

曾野綾子
二十一歳の父 5
平岩弓枝
鏨師 137
杉本苑子
女形の歯 157
ああ三百七十里 185
永井路子
覇樹 203
萩原葉子
花笑み 247

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

真杉静枝
小魚の心 277
森三千代
蔓の花 291
大田洋子
半人間 307
中村佐喜子
女流文学者会のあゆみ6 350
尾崎秀樹
解説 女流文学における戦前と戦後 355

裝幀　安東澄

二十一歳の父

曾野　綾子

曾野　綾子

昭和六(一九三一)・九・一七～。東京に生まれる。本名三浦知寿子。聖心女子大英文科卒。昭和二六年、同人雑誌「ラマンチャ」に発表した「裾野」が臼井吉見に認められ、第一五次「新思潮」に参加。同二八年在学中に同人三浦朱門と結婚。同二九年、「遠来の客たち」が芥川賞候補となり文壇に登場した。同三一年の東南アジア旅行、同三四年の世界早まわり飛行への参加、同三五年の南北アメリカ旅行、同三七年のヨーロッパ旅行をはじめ、その後も各地への旅行を経験している。

主な著書に『黎明』(昭32)、『死者の海』(昭33)、『たまゆら』(昭34)、『能面の家』(昭35)、『女神出奔』(昭36)、『リオ・グランデ』、『午後の微笑』(昭37)、『海抜0米』、『二十一歳の父』(昭38)、『弥勒』(昭41)、『砂糖菓子が壊れるとき』(昭42)、『無名碑』(昭44)、『誰のために愛するか』、『生贄の島』(昭45)、『塗りこめた声』、『曾野綾子選集』全七巻(昭46)、『幸福という名の不幸』(昭47)、『奇蹟』、『太郎物語』(昭48)などがある。

一章　学　僑

1

バンコックの飛行場はむしあつかった。

給油のために下りた飛行機の客は、ぞろぞろと連れだって、冷房のきいた食堂の方へ歩いて行った。黄色い衣を着た原地人の僧侶が何人かプノンペン行きの飛行機の改札に並んでいるのがみえる。

越源一郎・神田大学教授も食堂行きの群の中の一人だった。越教授は一年間を西独で過して、今、日本へ帰る途中だった。

東まわりの飛行機は時差を調整すると、時間がどんどんとんで行くような感じである。時計の針は、着陸地点ごとに、三十分から時には一時間以上も時間をすすめることになる。

ここまで来ると越は帰心矢の如しであった。いい加減にして早く着いてくれないか、と思う以外にない。香港で一泊したら、という案もあったが彼は直行するスケジュールをたてた。彼は気の短い男だったので、時計の針をすすめてもなお、時間の経つのがもどかしくてならなかった。

食堂に入ると越は、彼が乗って来た飛行機会社の旗のたっているテーブルに手もちぶさたに腰を下ろした。ボーイが何を飲むかとききに来たので、彼はコカコーラと答えた。彼は何を飲むかを考えるのも面倒くさい時は、いつもコカコーラと答えるのであった。

一刻も早く日本に帰りたいとは言っても、越は、日本に帰ることによって何かしら期待していることがある、という訳ではなかった。日本へ帰ったら、久しぶりに温泉に行って、浴衣がけでのんびりしてみたいとか、寿司を食ってみたいとかいう欲望もなかった。越は、日本座敷などいらなかったし、ドイツ風の黒パンとビールとソーセージさえあれば別に飢死にすることはあるまいと考えてこの一年を暮して来た。彼はそういうことには、恐ろしく無頓着であった。

むしろ彼は、日本に帰るや否や、再び彼のまわりにへばりつくように戻って来る筈の、気重な生活に対処して暮して行かねばならないことに、或る種の当惑を感じてはいた。彼は別に家庭というものを煩しいと思っている訳ではなかったが、多くの場合、一人になりたいという願望のほうが強かった。彼は、確かにあそこにある、という本を掃除のために動かされるよりは埃だらけの部屋にいるほうがよかったし、下着を手まめに着換えないといって注意されることもうるさかった。下着の汚れは彼の精神活動を少しもさまたげない。下着

はむしろ少し汚れている位のほうが人間的だと彼は思うのであった。体臭が強いうえに、へどを吐きたくなるような不潔な衣服を身につけている外国人を見た時に、彼はいっそうその観を深くした。軽薄な言い方をすれば、汚ないのは最も端的に、人間的であるような感じだった。

越はボーイの持って来たコカコーラをのみながら、向うのテーブルで紅茶をのんでいる一人の男を見るともなく注目していた。

越はその男を、どこかで見たことがあるような気がしてならなかった。しかし、彼はどこで会ったかということを思い出せなかったし、よく見ているうちに、果してその男が日本人かどうかも疑わしいような気がして来た。五十歳は越しているであろうか。やせた体に黒っぽい背広を着て、眼鏡をかけている。

そのうちに相手も越の視線に気がついて、何となくこちらを注意するようになったので、越はもうそれ以上、相手を観察するのをやめた。

給油の時間は三十分、ということになっている。しかし、規定通りの時間で作業が終ったためしはないようであった。越は、日本へ帰りつく、という確固とした目的を持っているにも拘らず、空になったコカコーラの壜を前にして現在のこの時間を妙に虚無的なものに感じていた。

やっとアナウンスがあって乗客が食堂を出た時、越は急ぎ足に歩いたので、どこかで会ったことのあるような男をはるかにひきはなしてしまった。タラップのところまで来た時、越は先頭から三番目だった。黒っぽい背広の男は灼けつくような飛行場をゆっくり歩いていた。たとえ彼が日本人でどこかで会ったことがあったとしても、それは別に何か大変に興味深かったとか、感動的だったとか、という記憶に結びついて出会ったのではなさそうだった。そう思いなおすと、越の、その男に対する興味は半減した。

越はさっさと自分の席に坐って座席のベルトを締めた。すると驚いたことに、その男が通路をへだてた反対側の席に陣どったのである。そこはバンコックまで、空席だったところだった。男は足許にカバンを置き、すわらないうちにズボンのポケットからピースの箱を出しておいた。用意周到な感じだった。それから彼は極く何気なく、越教授の方へ向いて言った。

「神田大学の越先生ではいらっしゃいませんか」

「はあ越ですが、あなたは……」

「広報社の酒匂(さかわ)でございます。いつぞやラジオ番組の時にもお世話になりまして」

「ああ、どこかでお目にかかったと思いました」

広報社というのは、有名な広告取次会社であった。広告そのものばかりでなく、テレビやラジオ番組の作成から、会社のパンフレットを作ることまで、その営業種目は広汎にわたっていた。越教授は、一年前外国へ行く間際に「経済白書を見る」という十五分番組の録音を、広報社の銀座スタジオで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

とったことがあり、その時、この酒匂氏に会ったことを思い出した。
飛行機がプロペラをまわし始めて、スチュワーデスがチューインガムを配りに来た時、酒匂氏は改めて越に名刺を渡した。それには、広報社　外国部長　酒匂彰とあった。
二人はそれから暫く黙った。滑走路の端まで来て飛行機のプロペラがやかましくなったので、否応なく沈黙せざるを得なかったのである。
やがて飛行機は、腹にこたえるような響きで滑走を始め、東南アジアの黒ずんだ分厚な森がじっとりと熱いきらめくような熱帯の陽の下に低く拡がって見え出したころ、やっと禁煙やベルト着用のサインが消えて、越は座席の中で、体を少しでも楽にしようとしてすわりなおした。
「いかがです」
酒匂は一服つけようとしてその前にピースの箱を越にさし出した。
「いやどうも、それでは久しぶりですから頂きますかな」
越はそれほど煙草好き、というわけではなかった。彼は煙草は弱いものなら何でも好きだったので、むしろピースよりも英国タバコを愛用するのである。しかし彼は酒匂の好意を無にしたくなかった。只ピースの味は日本の生活のうっとうしさを、感覚的に彼に思いおこさせた。日本は近きにありという感じだった。
「あの節御挨拶申しあげようと思っていましたが、実は私共の息子が先生に御厄介になっております」
酒匂は言った。
「そうですか」
越はちょっと考えこんだ。
「覚えがありませんな。私の演習に出ていられますか」
「いや、とても、そんなに出来がよくありませんので、御記憶はないと思いますが。只先生の講義を伺っている、という話をきいたことがあります」
「そうですか。何しろ経済学部は数が多いですからね」
越は言った。
「私共では長男のほうは、まあまあ出来がよろしいのです。東大を出て、日銀に入りました。しかし次男はさんざんです。お世話になっておきながらそういうのもひどいものですが、実は入学の時もやっと入れて頂いたような状態でした」
酒匂は意味深長なものの言いかたをした。それからふと彼は長男の結婚式の日の嫁の姿を思い出した。白無垢を着て神神しいような花嫁であり、色なおしになって客をおくり出す時には、いっぱしもの馴れたホステスぶりを見せた女である。嫁はW銀行頭取の娘でカトリック系の女子大学を出ている。語学もお料理も刺繍もみっちり仕込まれていた。式は帝国ホテルで行われ仲人は広報社社長であった。立派な息子は、いい娘を嫁につかまえることが出来るという見本のような結婚式である。
その宴に、次男の基次は、髪も髭もぼうぼうの姿で現われ

た。式の前々日床屋へ行けと命じると、それ位なら兄さんの結婚式には出ない、と言い出した。基次はどちらかというと無口で無器用な子であったが、大学の演劇部に籍をおいて、映画のエキストラに出るために髪と髭を伸ばしているのだった。

「金がいるなら、その分だけお父さんがやるから、エキストラはやめて床屋へ行け」

酒匂はそう言ったが、基次はうんと言わなかった。

「何という映画だ？」

しまいには酒匂は息子に尋ねた。それは「敗走千里」という戦争ものの映画であった。舞台はフィリッピンのジャングルが主である。

「だけど僕の出るのは違うんだ。夕陽を受けた砂浜に、見渡す限り死体が散らばってる、その死体になりに行くんです。やせて、髪や髭がのびている学生を募集してるんです」

酒匂は呆気にとられた。きいてみると、エキストラばかりではあるが、基次は実に今までに八本の映画に出演しているというのである。死体役になることにどうしてそう執着するのか酒匂はとても理解出来なかった。しかし、父子はいくらか言い合った挙句、結局、酒匂は折れることにした。

基次は乞食のような頭に学生服を着こんで結婚式に列席した。酒匂は男であったのでいざとなれば次男の髪のことなど気にもかけていなかったが、基次の叔母にあたる酒匂の妹は気にして、会う限りの人に基次の言訳ばかりしていた。

「お宅の御子息はどうか知らないが、うちの息子も私の学部におりましてね、これが又本当にいい加減な奴なんです」

越は言った。

「ほう」

酒匂はじっと横から教授の顔を見つめた。

「私の講義にも仕方なく出ておったですがね。授業が終ると真先に教室をとび出して、こそこそ逃げ出す始末です。気のいい、可愛いところのある人間なんだが、可愛いなどというのは、あなた、女にはいいが、男には実に何のとりえもない性格ですからね」

「しかしそれには少々御子息さんに同情すべき点がありそうですな。お父さんが教えていられる学校というものは居にくいだろうと思いますね」

二人は黙った。男親の感情というものはごまかしのきかない正直なところがあった。

「ときにあなたはどちらへ行かれました」

越教授は尋ねた。

「二月ばかり、香港、マニラからシンガポールをまわりました。シンガポールにいくつか用が重っていましたので。先生はどれ位、外国ですごされました？」

酒匂はきき返した。

「丁度一年でした」

「東南アジアは、下りてゆっくりごらんになりましたか」

「いや、それが、まだ知らないのです。この前はアメリカへ

行きましてね。今度も帰りにゆっくり見ながら帰るつもりだったのが、少々早く家に帰ったほうがよさそうな用事も出来たものですから」
そう答えてから越は改めて相手にきき返した。
「東南アジアは如何です」
「暑くて閉口しました。私は北海道の産ですので、寒いのはいくら寒くてもかまわないんだが、むし風呂のような暑さでは、何も考えられないです」
教授はベイルートに着陸した時の暑さを思った。レバノンもひどい湿度だった。その湿度が甘い夜の雰囲気を作る、一つの要素になっていた。まだ本当に完成してはいない飛行場のヴェランダから見ると、夜の暗さは湿気にうるんでつややかな黒味を帯び、遠く岡にひろがる町の灯と、足許のヴェランダにおかれた強烈な赤い花とを、くっきりと印象づけていた。
「食物もまずいそうですな」
教授は言った。
「まあひどいですな。シンガポールや香港はまだいいですが、三年前に印度やビルマをまわった時はさんざんでした。肉は固い、米はくさい、パンはべとべとで、暑さも手伝って食欲は全くなくなってしまいました。中でどこへ行ってもどうやら食えるのは支那料理だけですね」
「支那料理の材料というのは、あれはずいぶん行きわたっているものなんでしょうな」
「在留邦人にききますと、やはり華僑がいる限り、豆腐は必ずあるそうです」
「そうですかね。そうなんでしょうね」
「かねがね話にはきいていましたが、実際に歩いてみても、華僑という奴はすごいですな。東南アジア全体にべっとりと虱がとりつくように拡がっているという感じですね」
「そうでしょう」
「全くあれを見ると日本人の出稼ぎなんてもろいもんですな」
その時、スチュワーデスが食事のメニューを配りに来たので二人は話を中断した。
羽田に着いたのは真夜中近くだった。飛行機の通路の中で、二人の男たちは挨拶を交した。
「又何かと先生にはお世話になることと思いますが、どうぞ今後ともよろしく」
酒匂は越に言った。それは広報社の番組へ出演してもらいたいということなのか、息子をよろしく、ということなのか教授にはわからなかった。しかし越はそんなことには無頓着に答えた。
「いや、お宅には毎年うちの学生を沢山とって頂いておりまして、本当にありがたく思っています。こちらこそ今後ともよろしく願います」
二人はちょっと道を譲り合った末、教授が先にタラップを下りた。爽かな故国の秋風だと教授は感じた。酒匂氏は寒さが身にしみるようだった。たった二カ月間だが、皮膚は南方ぼけであった。

二人は言い合わせたように、フィンガーに立って手をふっている家族の顔を見あげた。酒匂は手をふり、越は只眼で微笑しただけであったが、二人はそれぞれに出迎えの人々を意識していた。

酒匂は会社の連中の顔の中に長男とその嫁の美しい笑顔を見た。妻はもともと来る筈がない。酒匂夫人はもう十年間も脊椎カリエスでねたきりであった。只次男の基次の姿だけが見当らないのが酒匂は不思議だった。

越教授には「お父さん、お帰り！」と叫んでいる息子の秋穂が妻と並んでいる姿が見えた。妻は彼の二番目の妻でまだ三十五だった。秋穂は継母と肩をすりよせて楽しそうに立っていた。教授は二人の姿を認めるとすぐ、秋穂にとっては、姉に当る娘の屋寿子の顔を探した。彼女は来ていないようだった。多分いないだろう、と教授は覚悟していたものの、本当に見えないとなると、彼の心は急に石を抱いたように重くなった。

しかし彼は黙々と税関のほうへ一年ぶりの日本の土を踏みしめながら歩いて行った。

2

酒匂基次は刀を抜いた。刀身がぎらりと月光の中に浮く。隣の越秋穂の顔が半分だけくっきり見え、その低い かまえに、僅かな息づかいの正しさだけが感じられた。

「誰だっ！」

暗闇の中に殺気だった声。

大槻内蔵允が、こちらをむいてにやりと笑った。

「答えたくなくば、答えなくてもかまわぬ。わしにはおぬしたちがわかっておる」

どこかでちちちと虫が鳴いた。大槻の傍らにかまえている仲間の提燈が心なしかふるえている。

「それならきこう！　おぬしが真如院さまに対して、何をしたかきかせてもらおう！」

「真如院さまか、ははははは」

大槻は不敵に笑った。

基次は刀のつかを握りなおした。秋穂は唇をしめらせた。

「真如院さまか」

大槻は冷笑を浮かべながらくり返した。

「真如院さまがどうした」

「それをおぬしにきいておるのだッ！」

「真如院さまなど、わしの知ったことではない！」

「何を！」

「ほざくなッ！」

声が飛んだ。

「真如院さまのことなど、わしは知らぬ。それにかん違いを致すな。わしを切ってみたところで何になる！　この大槻ひとりを切ってみたとて、何がどれだけよくなるというのだ！腐り切っているのは、おぬしらの心ではないか！　大槻ひとりに罪をきせれば事がすむと思うか！　たわけ者奴がっ！」

「ううむ！」
「問答無用！　やってしまえ」
大槻は闇の中の声に応じてひらりと刀をぬいた。
「斬れっ！」
秋穂は低く青眼にかまえたまま、じりじりと大槻に近寄った。
「やあっ！」
と斬りこむ一瞬、大槻の刀が稲妻のようにひらめいた。
「うむッ！」
刀がぽろり、と秋穂の手から落ちた。秋穂の左手が切られた胴を、右手が虚空を掴んだ。彼の倒れたくさむらの中で驚いた虫がちちちともう一度鳴いた。
「ちょっと待って！」
そこで声がした。大槻が棒立ちになり、基次は刀を杖にして腰をのばした。切られてころがっていた秋穂がむくむくと起き上った。
「おーい、そこんとこをよ。もう少しスピード・アップしてくんないかなあ。パッパッパッともう少し早目にさ」
Yシャツ姿の小男が現われて言った。それがフロア・ディレクターだった。カメラマンは一息いれて、手袋をはめた手で、ごしごし頭をかき始めた。大槻のからみ役にまわっていた連中の中には、不平を言いたいのをようやっと我慢してやっているんだ、というようなしらじらしい表情を見せるのもいた。

大槻役の俳優が殺陣（たて）には馴れていないのである。からみ役というものは、本来ならば、自分がリードして切られてやるのが、最上なのだが、しん（主役）がうまければ、まるであやつり糸でたぐられているように、ぽいぽいとつぼにはまって、小気味のいいほど爽快に切られて行くものだ。
ところが、しんが馴れないとそうはいかない。しんとからみの間には気持の疎通が全くないばかりか、動作はねばっこくなってぬきさしならなくなり、気合には欠けて子供のチャンバラのようになる。
「おっさん、ちっとは本気で練習してくんねえかなあ」とからみの連中は囁き合う。始末に悪いのは、カンと運動神経が鈍い上に、俺はゲイジュツ的な俳優であって、殺陣師（たてし）じゃないのだから、という新劇畑の人間である。こういう相手に対しては、練習の時にはおとなしくあしらっておいて、本番の時に意地悪をする。うまく切られてやらないのだ。立ちまわりでは、しんよりからみのほうが、ずっと立場が有利である。秋穂は、これは甚だ暗示的な面白いことだと考えていた。それは戦後の世界における日本が、米ソなどという大国を相手に身を処する場合の、一種の理想的なあり方を象徴しているようでもあったし、自分のように三流大学にしか入れず、一流会社に一生身柄をあずかってもらうという望みもない若者の、最も会得すべき処世術の奥義のように思うこともある。
「加賀騒動」の本番は夜十時からである。カメラ・リハーサ

ルが終って休憩に入ると、秋穂は羽二重の衣裳のふところから眼鏡を出してかけた。それほど強い近視ではないが、乱視が入っているので、長くかけないでいると何となく頭が重くなるのである。ちょんまげに眼鏡、という風俗は、どうみても二枚目ではなかったが、なかなか愛嬌があった。

神田大学の経済学部に殺陣研究会が出来たのは今から二年ほど前のことである。二人は研究会の第一期生で、半年前に京都の或る映画会社が東京から殺陣師をそっくり連れていってしまったために、一時チャンバラの出来る人間が払底した時、うまくテレビに入りこんだ口である。

秋穂は、竹光を左手にもったまま、のっそりとあたりを見まわして、酒匂基次を見つけると、彼のほうへ歩いて行った。

「おい、酒匂！」

「うん！」

「君んちのおやじさん、帰って来たろう」

基次は、やや無表情ながら、どこかしらに微かな暗いかげを見せた様子で、長身の越の顔を見上げた。

「ああ、そうらしい」

「会わないのか？　まだ」

「うん」

「うちのおやじが、飛行機の中で、君のおやじさんに会ったんだってさ」

基次は頷いただけであった。

「君、今、うちにいないの？」

秋穂が尋ねた。

「うん」

「憂鬱だな、おやじが帰って来よると」

秋穂はそれを大して憂鬱でもなさそうに、むしろいたずらっぽい微笑を泛かべながら言った。青くそめて、ひげそりあとを強調した厚化粧の頬に、彼はえくぼさえ泛かべた。

「僕んちじゃな、おやじさんが一年間いない間に、姉貴が男を作って逃げ出してさ」

秋穂は言った。基次はぼんやりと、端正な顔でうなずいた。

「うちじゃお袋がまま母だからさ。姉貴とお袋とはすごく仲が悪いんだ。女って奴は、実に始末の悪いほど単純で陰性なものだからな」

秋穂はそう言ってから、

「君には、女の姉妹がいる？」

「いないよ。秀才の兄貴がひとりいる」

「いいじゃないか。秀才の兄貴なら、小遣いをくれるだろ」

「僕あ、もらいたくないね」

「いや、秀才の兄貴っていうのは、僕の理想なんだ。秀才がひとりいれば、後の息子はどんなになろうとも、おやじはあきらめいいだろうからな」

「うちのおやじはあきらめてないんだ」

基次は自信なさそうに言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c